



学校だより

一人一人が主人公

令和7年6月16日
豊岡市立但東中学校
6月号

【 学校教育目標 : ふるさとの未来を創る 自分をつくる 但東の子 】

「修学旅行の意義」それは「分かち合うこと」

5月28日から30日にかけて、3年生は修学旅行に行ってきました。右の写真は「上野動物園」、左下は「東京タワー」での写真です。どちらも修学旅行の定番といった場所での集合写真です。これを見ると、修学旅行は今も昔もそう変わらないと感じます。昔と異なるのは、たくさんの外国人観光客がいる事くらいでしょうか。

近年、「インバウンド景気で、外国人観光客が多くて大変なんですよ」という話をよく聞きます。確かに東京のどこに行っても多くの外国人観光客で賑わっていました。しかし外国人観光客から見れば、「いやいや、私たちより学生の方が多いただろう。そもそも、なぜ学生がこんな昼日中に集団で歩き回っているんだ?」と驚いているに違いありません。おそらくこれが世界の常識です。



外国人観光客からすれば驚きのこの光景は、私たち日本人にとってはごく当たり前の風景です。なぜなら修学旅行という学校行事は「日本の伝統的な風物詩」として、既に日本の社会に広く浸透しているからです。それどころか修学旅行は、もはや私たち日本人の「学生時代の原風景・心象風景」だと言っても過言ではないかもしれません。これほど国民に広く認知され、心に残る学校行事はそう多くはないのではないのでしょうか。

しかしその反面、修学旅行は本当に大変な行事です。学校・学級の日常をあえてそのまま校外へ持ち出して活動するわけですから、何もトラブルがないわけがありません。旅行費用が高騰している現代においては、個人や気心の知れた小グループで学習旅行をした方がよほど便利で効率的だという意見もあります。学校・学級単位で行う「修学旅行の意義」が問われる時代となりました。

学校・学級単位で行う修学旅行では、子どもたちは班の行程や活動内容を自身で考えたり役割分担をしたりして、自分だけでなく誰もが楽しく無理なく活動できるように工夫しなければなりません。ときには不自由さを感じたり、我慢したりしないといけないことも多々あります。思いがけないトラブルもあります。それだけに喜びや苦勞をみんなで分かち合えた体験は子どもたちの心に強く残ります。この「分かち合うこと」の大切さの実感が、修学旅行に行く前と行った後では全く異なることに子どもたちは気付かされることになります。その気付きが普段の学校生活にも生かされます。そういった点で修学旅行は非常に優れた体験型学習プログラムであることがわかります。

喜びは $100\% \times 1 \text{人} = 100\%$ が限界ですが、仮に 80% でも $\times 5 \text{人}$ ならば $= 400\%$ になります。苦勞は $100\% \div 1 \text{人} = 100\%$ のままですが、 $100\% \div 5 \text{人}$ ならば $= 20\%$ になります。分かち合う人数が増えればその値に限界はありません。これが「分かち合うこと」の意義です。

自己理解とは「何ができる何ができないのか」を知ること

3年生が修学旅行から帰ってくるのと入れ替わりで、2年生は6月2日から6日にかけてトライやる・ウィーク活動を実施しました。トライやる・ウィークのスローガンは「自分を知る、社会を知る、気づきの一週間」です。

集団行動を主眼とした修学旅行とは異なり、トライやる・ウィークでは子どもたち個々の興味関心に基づいた個別の職業体験を主眼としています。修学旅行は「分かち合うこと」を大切に活動ですが、トライやる・ウィークではまず「自分を知る」つまり「自己理解」を深めることが狙いとなります。

「自分は 自分の主人公 世界でただひとりの 自分をつくっていく責任者」という東井義雄先生の言葉にもありますように、自分自身の人生を自らの力で切り拓くためには、自分に何ができる何ができないのかを正しく「自己理解」する力が必要だと考えます。

一方で、子どもたちには無限の可能性がある。やろうと思えば何でもできるのだから、自らの能力を自ら決めつけるような考え方は、子どもの持つ可能性を失わせてしまうのではないかと、といった意見もあるかもしれません。

もちろんこの意見は否定されるものではありません。子どもたちには無限の可能性がありますが、しかし人生は有限です。いつまでも無限の可能性に浸っていては、有限な人生においてはその無限の可能性を失ってしまうことになります。自らの人生を豊かなものにするには、自らの可能性を適切に取捨選択する能力が必要になるのです。確かに自己を過小評価してはいけません。しかし逆に過大評価してもいけません。それが「自己理解」を深めるという事であり「自らを磨く」という事だと私は考えます。

このトライやる・ウィークは、事前にアンケートを取ったり協賛企業を増やしたりして、なるべく子どもたちの希望に沿うように尽力していますが、必ずしも子どもたちの希望した職種の体験ができるわけではありません。これもまた社会の仕組みと同じであり、人生においては実力や才能だけでなく、縁と出会いをいかに生かすかが重要であることを子どもたちは身を持って体験することになります。

縁と出会いは、意図せず意外なところで自分の隠れた才能を発見したり、自分の中にある新たな気づきや可能性を引き出したりすることができる「自己理解」の宝庫です。これら偶然の縁や出会いを大切にすることが子どもたちの豊かな人生につながると考えます。

こうした新たな縁や出会いを重ねることで、子どもたちはさらに「自己理解」を深めていきます。

